
君を守る

notomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を守る

【Zマーク】

N64370

【作者名】

notomo

【あらすじ】

少女とぬいぐるみの絆をえがきました。

十一月一十七日。僕のお誕生日。赤いチエックのリボンを首に巻いてもらつて、すてきな「お名前」をもらつた日。

リボンを巻くのがへんだった？ わかつてないなあ、君たちは。ぼくらぬごぐるみは、お名前と、リボンをつけてもらつた日がお誕生日なんだよ。ゆなちゃんが、自分の一番のお気に入りを、僕に巻いてくれたんだ。お名前はナイト、

「私を守ってくれるナイトよ。」

だつて。かっこいいでしょ。その日から、ぼく、決めたんだ。ゆなちゃんの、ゆなちゃんだけのナイトになるつて。

ぼくとゆなちゃんは、それからずーっと仲良し。いつも、頭をなでてくれて、僕の毛並みはどんどんつやつやになつていく。ぼくは、世界で一番ゆなちゃんのことがだいすき。きっと、ゆなちゃんだつてそうだつたんだよ。

ゆなちゃんの十歳のお誕生日。この日は、こそがしにパパとママも早く帰つてきて、ゆなちゃんといつぱい遊んでくれる。ゆなちゃんがうれしいと、ぼくもうれしくつてたまらない。でも、その年は、ちがつたんだ。

「学校から急いで帰つてきたゆなちゃんを待つていたのは、知らない女人の人。

「あなたの両親は、シャッキンとあなたのこじて、びっかーつちまつたよ。」

ひどく乱暴な言葉。シャッキンってなんだろう？ パパとママは、もう戻つてこないの？

ゆなちゃんは、その意味をわかつてゐみたいだつた。

「わざと荷物まとめな。私だつて、あんたとくらしたいわけじゃないんだ。わざとしないこと、この家はもうなくなるんだ、家ごとつぶされたくなかったらいいことを聞くんだよ。」

ゆなちゃんは、大急ぎで、荷物をまとめた。もちろん、ぼくも力バンに入れてくれた。

ゆなちゃん、泣いてなかつた。でも、ぼくにはわかるんだ。ゆなちゃんが、どんなに辛くて、悲しいか。だつて、ずっと一緒だつたんだよ。

ゆなちゃんとぼくは、こわい女の人の車に押し込められて、どんどんお家からはなれていつた。車のなかで、ゆなちゃんはずつとぼくを抱きしめていた。

「ナイト、心配しなくて平氣よ。わたし、強い子だもん。」

「じとばとはうはらに、ぼくの顔に、ぽたぽた水が落ちてきた。涙」ぼくの瞳からはでないけれど、ゆなちゃんの痛みは、全部ぼく、わかるんだ。これから、絶対ゆなちゃんを守る。

「なくガキは放り出すよ!」

ゆなちゃんは、ぐつと息をのんで、涙をこらえた。ぼくのじいろに、火がついたみたいに、熱い。この女人の人をやつつけたい。こんな気持ちははじめてだつた。動かない手足が、一緒に涙を流すこともできない瞳が、憎らしい。ぼくは、ゆなちゃんのナイト失格だよ。一時間後、ぼくたちは、放り出されるように、小さな小屋にいられた。本当に狭くて、なんだか畠のよくなにおいがした。

「今日からあんたたちここでくらすんだよ。

前の家に少しでも近づいてごらん、ひどいからね。」

ゆなちゃんは、だまつとうなづいた。女人人がいつてしまうと、僕たちは一人きりになつた。本当に何もない部屋。ゆなちゃんは、突然火がついたみたいに泣き出して、ぼくをぎゅーっと抱きしめた。

「ナイトは、いなくならないよね。」

当たり前じやない。ゆなちゃんから、離れたりするもんか。ゆなちゃんは、めつたになかないんだ。

パパが、ママをぶつのを止めに入つて、頭にけがをしたときだつて、ママを安心させるために泣かなかつた。でも、その夜、ぼくの手をほう帯に当てて、声を出さないで泣いてたの、知つてるんだ。

「ナイトの手は、魔法の手だね。」

うそ。ぼくにそんな力はないよ。ただ、そばにいることしかできないんだ。ゆなちゃんが泣くのは、ぼくと一人のときだけ。ぼくのからだには、ゆなちゃんの悲しい気持ちが、いっぱい詰まってる。何もできないぼくを、ナイトだって言ってくれるゆなちゃん。何もできないぼくは、せめて、ゆなちゃんの悲しみを全部吸い取りたいって思うんだ。

小屋での生活は、大変だった。学校にも行けない。「ほんもめつたにもらえない。最初は、ぼくとお話ししてたゆなちゃんも、だんだんお話ししなくなつた。細い、細い声で

「ナイト、ナイト。」

ついで、ぼくの名前を呼び続けた。ぼくも、

「ここにいるよ、絶対はなれないから。ね。」

つて、声にならない声で、ゆなちゃんに伝え続けた。

ゆなちゃんは、とうとう立てなくなつてしまつた。横になつたままぼくをだいて、呼び声も、小さくなるばかりだった。扉の近くで、一人で寄りそつて、ただ、お互ひの名前を繰り返す日々。

何日がたつただろう、声が聞こえた

「なんだー、この赤いの。」

ぼくのリボンが、小屋の小さな出口から、はみだしていたんだ。男の人の声。小さなゆなちゃんではあけられなかつた扉が、男の人の手で、開けられた。まぶしい日差しが差し込んで、ぼくもゆなちゃんも、意識がなくなつてしまつた。

今、ゆなちゃんは、たくさんのお友達、優しい園長先生と暮らしてゐる。もちろん、ぼくも、ゆなちゃんと一緒。遊ぶときも、ご飯のときも。学校に行つている間はお留守番だけど、ぼくは大丈夫。帰つてきたら、ゆなちゃんはぼくを真つ先に抱きしめてくれるつてわかつてゐるから。これからも、ずーっと君だけのナイトでいるからね。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437o/>

君を守る

2010年11月1日18時03分発行